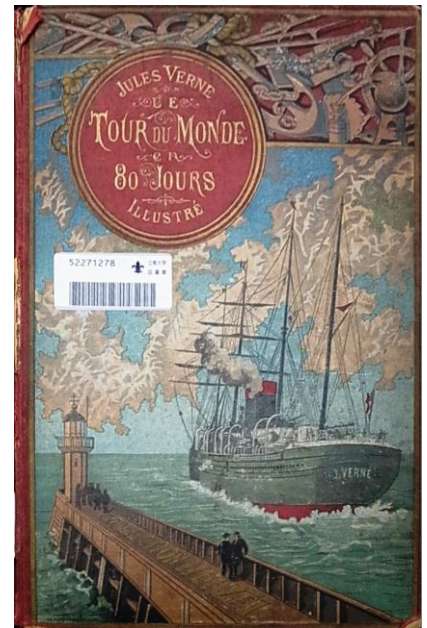


図書館資料展示（新座図書館）

＜ジュール・ヴェルヌ『80日間世界一周』：

Le Tour du Monde en Quatre-Vingts Jours＞

ウィリアムズ主教が来日して英語塾として立教を建学した 1874 年の前年、フランスではジュール・ヴェルヌの『80日間世界一周』が出版され、世界的なベストセラーとなりました。マゼランの船が3年をかけて世界一周し地球が丸いことを証明したのは16世紀ですが、「鉄道」「蒸気船」「電信」によって、19世紀は飛躍的にグローバル化が進んだ時代でもありました。人とモノの移動がグローバル化するとは、それまで地域単位だった市場が国単位、世界単位に統合されていく事態を、そして、単位と時間が統一されて世界が均質化していく状況を意味します。具体的には、メートル法が各国で採用され、鉄道の時刻表の必要から標準時が統一されていく流れがこの変化に対応します。鉄道と蒸気船という大量輸送手段によって大衆化された旅行は、その経験が「質」的なものから「量」的なものに、「個人」的なものから「集団」的なものになりました。今や移動は、誰にとっても等しく流れる「時間」の経験にすぎなくなったのです。こうして冒険の時代が緩やかな終焉を迎えつつあった1869年、アメリカ横断鉄道とスエズ運河が相次いで開通すると、欧米の新聞各紙は早速、「世界一周」という距離が「80日間」という時間に換算されるようになったと書き立てました。共に実在のアメリカ人であるフォッグとトレインの世界一周を念頭に、グローバル化の最大の推進者たるイギリス人を主人公としてヴェルヌが書いた小説『80日間世界一周』には、冒険の終焉と観光の始まりが同時に描かれています。



『80日間世界一周』カラー挿絵版

立教大学図書館

＜展示資料＞

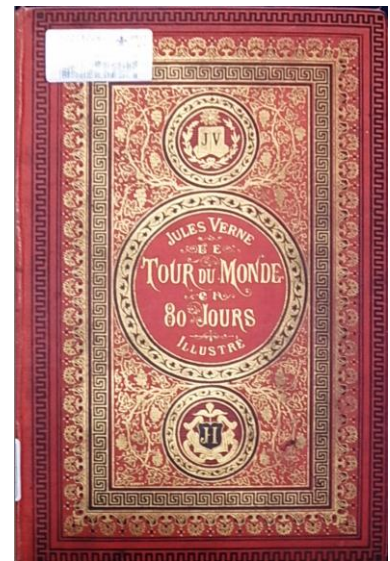
1. ヴェルヌ『80日間世界一周』初版第1刷（1873年）パリ刊（フランス語）
2. ヴェルヌ『80日間世界一周』挿絵版 パリ 1889（フランス語）
3. ヴェルヌ『80日間世界一周』彩色版 パリ [?]（フランス語）
4. 川島忠之助『新説八十日間世界一周』前編・後編 横浜 明治11-13年
5. フォッグ『世界周航記』著者献呈本 1872年（英語）
6. キーリング『旅行者のための横浜・東京案内』第4版 横浜 1890年（英語）
7. マレー『日本旅行ハンドブック』第3版 ロンドン 1891年（英語） など

ジュール・ヴェルヌと世界

観光学部交流文化学科 助教 石橋正孝

ジュール・ヴェルヌは1828年、フランスの港町ナントで裕福な代訴人の長男として生まれました。父親の仕事を継ぐべきところ、詩人や劇作家として成功することを夢見て、法律の勉強を終えたあともパリに留まり、長い修業時代に入ります。『椿姫』の小デュマを始めとする演劇関係者、同郷の友人イニャールら音楽関係者と親しく付き合いの中で、ヴェルヌが台本を書いたオペレッタが稀に上演されたり、歌詞を書いたシャンソンが単発的に刊行されたりしますが、一向に芽が出ないまま、いつしか十数年の歳月が流れ、妻子を抱えたヴェルヌは三十代の株式仲買人になっていました。

そんな時、転機が訪れます。イギリスとスコットランドを観光で訪れた時の経験に基づく小説風旅行記をある編集者に持ち込んだところ、厳しくダメ出しを受け、「もっとましなもの」を書いて出直してこいと一喝されたのです。その結果、1862年に書かれた『空中旅行』という小説が、編集者による書き直しの指示を経て、『気球に乗って五週間』という題で刊行され、ヴェルヌはようやく小説家デビューを果たしたのです。当時は操縦不可能だった気球を用いて未知のアフリカを横断するというこの小説は、本格的な空想旅行小説であり、気球をめぐる技術的な詳細はもちろん、アフリカに関する地理学的な情報がふんだんに書き込まれているにもかかわらず、堅苦しいどころか、ユーモアとスリルに満ちていました。ヴェルヌは、世界一周をした冒険家のジャック・アラゴと古くから付き合いがあり、劇作や詩作の傍ら、図書館に通って書き溜めたメモを元手に異国を舞台にした短編小説を幾つか雑誌に発表しており、その経験がここに来て思いがけず生きたという次第でした。



『80日間世界一周』カラー挿絵版

ヴェルヌを叱咤した十四歳年上の編集者はその名をピエール=ジュール・エツツェルといい、ロマン主義時代を代表する挿絵本の出版者として、バルザックやヴィクトル・ユゴーらと関わった過去を持ち、1851年のレイ・ボナパルトによるクーデター後にベルギーへ亡命を余儀なくされた共和主義者であり、P=J・スタールの筆名の下に自らも筆を執る作家でもありました。ヴェルヌと出会う直前の1860年に恩赦で帰国したエツツェルは、児童書出版に特化して検閲の目を潜り抜け、未来の共和主義者を育てるべく、絵入りの家庭向け総合雑誌『教育と娯楽誌』の刊行を準備しているところでした。その彼にとって、ヴェルヌはこの雑誌に打ってつけの作者だったのです。

『気球に乗って五週間』に続き、それぞれ北極点、地球の中心、そして月の征服に執念を燃やす主人公を描いた『ハテラス船長の航海と冒険』『地球の中心への旅(地底旅行)』『地球から月へ』が矢継ぎ早に書かれました。エツツェルはこれら一連の小説に〈驚異の旅〉という総タイトルを付け、挿絵入りシリーズとして改めて売り出すことにします。ヴェルヌにとって、挿絵本という特殊な刊行形態に伴う制約の下に執筆することは、演劇の世界で叩き込まれた下積みの経験に極めて似通っており、エツツェルの執拗な口出しやダメ出し、不利な出版契約を比較的容易に受け入れることができたのでした。『海底二万里』が発表された直後の1870年に勃発した普仏戦争で、二人の共同作業はいったん中断しますが、戦後すぐに書かれた『80日間世界一周』は仕切り直しに相当し、それまでの十年間に書かれた〈驚異の旅〉を「冒険の時代」の物語として総括

し、それに続く「観光の時代」の物語を予告するものでした。以後、ヴェルヌは〈驚異の旅〉全体に共通する目的として「世界の描写」を掲げ、作品ごとに舞台を変えるようになります。〈驚異の旅〉が完結した暁には、太陽系も含む全世界がシリーズの中に包含されることになるという壮大な計画を立てたわけです。この目論見は1905年の作者の死によって未完に終わりますが、残された地図上の空白地帯はごくわずかになっていました。

小説家として成功し、さらに『八十日間世界一周』（元々は演劇として書かれた作品でした）やロシアを舞台とする『ミシェル・ストロゴフ』の舞台化によって富を得たヴェルヌは、自家用ヨットを購入し、ヨーロッパ近海を頻りに航海していました。しかし、基本的にフランス以外の地を舞台とする〈驚異の旅〉で描かれるのは、こ

のうちの周辺的な地域（イギリス以北のヨーロッパでなければ、北アフリカ、東欧）に限られ、それ以外の各地にはまったく足を踏み入れていません。それでは、どのようにしてヴェルヌは行ったことのない土地を描いたのでしょうか。この当時はグローバル化と共に情報化が始まっていた時代であり、18世紀の『百科全書』以来の知のカタログ化が急速に進んでいました。ラルースを始めとする百科事典はもちろん、フランス社会を描き尽くそうとしたバルザックの連作〈人間喜劇〉、ゾラの〈ルーゴン＝マツカール叢書〉、そして〈驚異の旅〉もまた、こ

うした時代の風潮を体現する企画でした。ヴェルヌが執筆に当たって大いに参考にしていた——というよりも、「コピペ」していた——のは、1860年に創刊された絵入りの地理学雑誌『世界一周』でした。全世界をカタログ化していたこの雑誌をヴェルヌは定期購読していたのです。

『80日間世界一周』で描かれる横浜の「元ネタ」もこの雑誌に掲載されたエメ・アンベールの日本滞在記でした。もっともこの記事は約10年前のもので、小説の主人公フィリアス・フォッグたちが上陸する直前に開通していた日本初の鉄道（新橋＝横浜）を含む近代化には触れられていませんし、それどころか、アンベールの描いた春の光景がそのまま作中の秋に「コピペ」されるという齟齬も生じている始末（学生の皆さんはレポートを書く時にくれぐれも真似をしないように！）……近代化に邁進しつつあった開国直後の日本では、ヴェルヌ作品に対する関心も高く、多数の翻訳がすでに出ていましたが、そのすべてが英訳からの重訳でした。それに対し、

『80日間世界一周』は原作刊行の5年後の1878年に、川島忠之助によってフランス語から翻訳されています。これが原典から翻訳されたフランス文学の記念すべき第一号でした。『80日間世界一周』が新聞に連載された1872年には、トマス・クックが宣伝用に企画した世界初の世界一周ツアーが開催されていましたが（ちなみに、ヴェルヌとクックの間にはなんの影響関係もありません）、岩倉具視の遣欧使節団も世界一周の途にありました。ジャポニスム、曲芸、そして万博を通じてヨーロッパの人たちが日本を発見していたように、日本人にとっても世界は身近になっていたこの時代、『80日間世界一周』はまさしく同時代の作品として明治期の日本では受容されていたのでした。



『八十日間世界一周』日本語訳初版

<参考文献>

1. 『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜——「80日間世界一周」の世界』 新島進編 慶応義塾大学出版会 2010年
2. 『〈驚異の旅〉または出版をめぐる冒険——ジュール・ヴェルヌとピエール＝ジュール・エツツェル』 石橋正孝 左右社 2013年
3. 『名編集者エツツェルと巨匠たち——フランス文学秘史』 私市保彦 新曜社 2007年

「80 日間世界一周」 あらすじ

主人公は「謎の男」フィリアス・フォッグ氏

時は 1872 年。ロンドンで有名な社交クラブ〈改革クラブ〉のメンバーであるフィリアス・フォッグ氏という紳士がいた。おそらくイギリス人であること、持つ者の義務として必要なときには進んで慈善を行い、場合によっては匿名で困った人に援助の手を差し伸べる金持ちであることは分かっているが、どのような仕事しているかも、どのように財産を築いたかも、家庭生活も謎であった。彼の唯一の日課は〈改革クラブ〉に行き、新聞を読んだり、トランプゲームの「ホイスト」をしたりすること。

毎日恐ろしいほど機械的に規則正しい生活を送っており、ここ数年は間違いなくロンドンを離れていないが、世界のどんな土地についても知っていて、頭の中では世界を旅しているようであった。



フォッグ氏、パスパルトゥーを雇う

そんなフォッグ氏は、1872 年 10 月 2 日、髭剃り用のお湯の温度を 1 度間違えたため解雇された可哀相な男に代わって、新しい召使を雇うこととなった。ジャン・パスパルトゥーという 30 歳ほどの若いフランス人であった。過去には身の軽さを生かしてサーカスの軽業師、体操の先生や消防士をしたことがあるが、フランスでの放蕩生活に飽き、落ち着いた生活をしようと思い、5 年前からイギリスで召使いをしている。そしてこの度、「旅行をせずに、規則正しい生活を送る、機械のような主人に仕える」という理想的な機会に恵まれたのである。少なくとも、主人が帰宅するまで、パスパルトゥーはそう信じていた。

世界一周の旅へ

同じ日、〈改革クラブ〉では、ホイストをしながら、フォッグ氏とクラブのメンバーたちが 3 日前に起こったイングランド銀行の 5 万 5,000 ポンド盗難事件と 80 日間で世界一周が可能になったという「モーニング・クロニクル」誌の話題に夢中になっていた。そして、そのおしゃべりが、フォッグ氏の運命を変えることとなった。彼は「80 日間で世界を一周できる」という極めて困難な旅の成功に、自身の財産の半分である 2 万ポンドを掛けて旅立つことにしたのである。一緒にいた紳士 5 人は「できない」ほうにそれぞれ 4,000 ポンドを賭けて、彼を見送ることとなった。その後すぐに屋敷に戻ったフォッグ氏は、静かに暮らすことを夢見ていたパスパルトゥーに旅の準備を急かし、午後 8 時 45 分、二人を乗せた列車はパリへ向かった。

彼らの挑戦の成否は、イギリス中の新聞で話題となり、たちまち賭けの対象となった。しかし、出発から 1 週間経った 10 月 9 日、フォッグ氏が例のイングランド銀行盗難事件の犯人なのではないかという噂が出回り、新たにフォッグ氏に賭けるものは誰もいなくなってしまった。

事件の犯人を追う、フィックス刑事との出会い

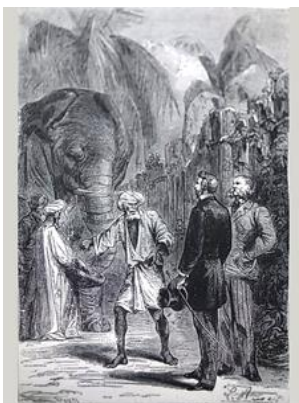
イングランド銀行盗難事件後に各地に配備された刑事の一人にフィックスという男がいた。彼は、ロンドン警視庁が犯人を捕まえた際に出す賞金に強く心を惹かれ、人相書きを元に、船に乗っているはずの犯人をスエズの棧橋で待っていた。その身体的特徴からフォッグ氏がその犯人であると確信したフィックス刑事は、パスポートにスタンプをもらおうとイギリス領事館の場所を尋ねてきたパスパルトゥーと知り合う。逮捕状がなくフォッグ氏の逮捕ができなかったため、フィックス刑事はフォッグ氏・パスパルトゥーと同じ船に乗り込み、紅海を旅することとなった。

船の中でパスパルトゥーと再会したフィックス刑事は、彼がフォッグ氏の召使いと知り、徐々に近づく。一方のフォッグ氏は、船旅中も「80 日間で世界を一周する」ということや難所への不安など全く面に出さず、外の景色にも無頓着で、船内に閉じこもり自分と同様な愛好家を見つけてホイストに興じていた。

ボンベイで船を下りた後も観光に惹かれる様子はまったくなく、領事館で用事を済ませ、食事を取っていた。フォッグ氏に買い物を頼まれたパスパルトゥーは、用事を済ませた後、好奇心からヒन्दウー教の寺院に足を踏み入れた。しかし、そこは当時キリスト教徒の参観を禁止していたいくつかの寺院の1つであり、彼を見て殴りかかってきた僧侶と闘い、全速力で逃げ出してきた。その顛末を知ったフィックス刑事は、インドに残り、彼らを追うことを決意したのであった。

インドの森で藩王の未亡人・アウダ夫人を救出する

ボンベイの駅を定刻に出たフォッグ氏とパスパルトゥー、そして彼を追うフィックス刑事を乗せた大インド半島鉄道であるが、コルビーという林間の村で突如止まってしまった。新聞によると全線開通しているはずが、未完成の区間があり、その間は自分達で移動しないとならなかったのである。このピンチをフォッグ氏は、近くにいた象使いから通常よりもかなり高い値段で象を購入し旅をする、という方法で乗り切り、次の鉄道駅を目指すこととなった。



森を進む中で、歌いながらヒन्दウー教徒の葬儀の行列が近づいてくるのを見た一行は、その中にまだ若くてヨーロッパ人のように色が白く、豪華な装身具で全身を飾り立てている女性を見つけた。一緒に象に乗っていたクロマーティ卿によると、「サティー」の一行であるということ。この地方の藩王が亡くなり、その葬儀の中で、妻のひとりである女性が意思に関わらず殉死というかたちで火に焼かれてしまうという。それを知ったフォッグ氏は、「あのご婦人を救いに行きましょう」と提案し、その優しさ感激したクロマーティ卿も同意した。彼らには12時間という余裕があったのである。また、今まで知らなかった主人の一面を見たパスパルトゥーもその提案に感動し、氷のような外見の下に熱く燃える魂を見たようで、虜になり始めていた。

一行は象使いの若者の進言に従って、救出作戦を日が暮れてから実行することにした。しかし、儀式の行われる寺院には酔っ払った者や、見張りがいてなかなか近づくことができない。翌朝、いよいよ儀式が始まる時となり、身体を自由を奪われ托鉢僧に連れられて行く婦人を見たフォッグ氏はついにナイフを手に飛び出そうとしたが、クロマーティ卿や象使いに止められた。そんな中、儀式に参加している者が、起き上がった藩王の遺体を見て、ひれ伏し始めた。なんと、召使いパスパルトゥーが機転を利かせて藩王の幽霊の演技をし、未亡人であるアウダ夫人をかつて救出してきたのである。その活躍ぶりをみたフォッグ氏は、「よくやった」と簡潔だが、氏としては最大の賛辞を送った。

そして、80 日間での世界一周達成を目指して旅は続く…

インドでは安心して暮らせず、また感謝の気持ちもあり、アウダ夫人も一緒に旅をすることとなった。彼らを追うフィックス刑事、そして80日間という旅の期限、その時々訪れる交通機関などの危機…果たして彼らは無事にロンドンに到着することはできるのだろうか。

多くの人を夢中にさせてきた小説は最後まで読者を飽きさせることなく進みます。ぜひ本書を手にとって、その魅力を存分に味わってみてください。

『80日間世界一周』展示資料、関連図書リスト（新座図書館版）

※は、新座図書館での展示資料です。

	書名・誌名	出版地・出版社	出版年	資料ID番号
	Le tour du monde en quatre-vingts jours / par Jules Verne (初版初刷) Le Tour du Monde en quatre-vingts jours. First edition, first issue. Paris, Bibliothèque d'Éducation & de Récréation J. Hetzel, [1873]. 8vo, pp [iv], 312	Paris: J. Hatzel	[1873]	52251401
① ※	<p>ヴェルヌ「80日間世界一周」初版第1刷 (1873年) パリ刊</p> <p>ジュール・ヴェルヌが1872年に発表した「八十日間世界一周」は、トーマス・クック社主催の世界一周ツアーが行われるようになったビクトリア朝時代に、イギリス人資産家フィリアス・フォッグが世界を80日で一周しようと試みる波瀾万丈の冒険物語である。本コピーは、ハーフ・タイトルの裏ページのGauthier Villarのアドレスの後に"1124-72"と印刷されている初版第1刷。著者の作品リストには、「毛皮の国」については準備中であることが述べられているが、この「80日間世界一周」については言及されていない。 ※丸善(株)カタログより</p>			
② ※	Le tour du monde en quatre-vingts jours / par Jules Verne ; dessins par de Neuville et L. Benett (挿絵版)	Paris: J. Hatzel	[1889]	52271279
	ヴェルヌ「80日間世界一周」(1889年) パリ刊 VERNE, Jules. Le Tour du Monde en quatre-vingts jours. ベネットによる挿絵版			
③ ※	Le tour du monde en quatre-vingts jours / par Jules Verne ; dessins par de Neuville et L. Benett (彩色版)	Paris: J. Hatzel	[?]	52271278
	ヴェルヌ「80日間世界一周」[?]年 パリ刊 VERNE, Jules. Le Tour du Monde en quatre-vingts jours. 彩色挿絵版			
④ ※	八十日間世界一周：新説 / ジェル・ヴェルヌ原著；川島忠之助譯 前編・後編	横浜：川島忠之助	1878-80	52249263
	川島忠之助(1853-1938 カワシマ・チウノスケ)は、江戸本所の生まれ。横浜でフランス人医師の学僕としてフランス語を習得。1876年にヨーロッパ使節団の通訳として渡欧しヨーロッパ各地を回った。旅行中に「80日間」の英訳本を入手し、1877年帰国後、1878-80年にかけて『フランス語版から訳して出版した。その後横浜正金銀行に勤め、取締役となる。本書は日本で初めてフランス文学を原書から和訳した書籍となった。明治15年には2冊目の和訳本、ポール・ヴェルニー「虚無党退治奇談」を出版した。(『我が祖父川島忠之助の生涯』2007 川島瑞枝著ほか参照)			
⑤ ※	Twenty thousand leagues under the sea / by Jules Verne	Cleveland: Burrows	1887	00033137
	アメリカで出版された「80日間世界一周」英訳版。戦前は米国聖公会から立教に洋書が大量に寄贈され、現在は新座保存書庫に所蔵されているが、そのなかの1冊。			
⑥ ※	Around the world in eighty days / by Jules Verne	London: Marston	[?]	00009206
	アメリカで出版された「海底一万里」英訳版。戦前は米国聖公会から立教に洋書が大量に寄贈され、現在は新座保存書庫に所蔵されているが、そのなかの1冊。			
⑦ ※	Round the world: letters from Japan, China, India, and Egypt / by William. Perry Fogg	Cleveland, Ohio	1872	52252290
	著者ペリー・フォッグ(1826-1909)は、米国Cleveland育ちの冒険作家。1868年クリーブランドを出発、ソルトレーク・シティ、サンフランシスコ経由で日本・中国・インド・エジプトを旅行。ウィリアム主教再来日と同じ時期に訪日、日本内陸部を旅行した最初の米国人の一人となる。本書はフォッグが新聞に寄稿した記事を			

	そのまま収録した私家版、自筆サイン入り著者献呈本。鶏卵紙に焼き付けられた写真 30 枚が付されている。『80 日間世界一周』の主人公の名前は、同書からとられたのではないかとされている。第 2 作目には、エジプト、中近東の旅行記『The Land of the Arabian Nights』が出版された。			
⑧ ※	Keeling's guide to Japan : Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, etc. 4th ed.	Yokohama : A. Farsari	1890	52251402
	「旅行者のための横浜・東京案内」第 4 版。キーリングのガイドブックは 1880 年に横浜のファルサーリ商会から発行された。初版では横浜・東京を中心に日光・富士箱根、京都・大阪、後に瀬戸内海・長崎まで拡大して紹介したハンディなガイドブックである。			
⑨ ※	A handbook for travellers in Japan / by Basil Hall Chamberlain and W.B. Mason 3rd ed.	London: J. Murray Yokohama: Kelly & Walsh	1891	00003931
	マレーの「日本旅行ハンドブック」第 3 版。ロンドン・マレー社のハンドブックは 1881 年から 1913 年まで刊行され、世界各地の旅行ガイドブックとして広く旅行案内書を代表するものだった。キーリングのハンドブックよりも詳細だったが、刊行頻度がやや少なかった。(参考文献:「世界漫遊家たちのニッポン」横浜開港資料館 1996)			
⑩	Le Tour du monde : nouveau journal des voyages 1-2	Paris : Hachette	1860	93-62116
	Le Tour du monde : nouveau journal des voyages 19-20	Paris : Hachette	1869	93-62125
	1860 年フランスの弁護士 E´douard Charton(1807-1890)によって創刊された旅行雑誌。記事が掲載された冊子が毎週発行され、年に 2 回目次や図版を製本すると一年間に 2 巻本に仕立てることができた。フランスの絵入り雑誌の基礎となったとされる。ヴェルヌは、「大陸蒸気列車時刻表」などのほか、こうした雑誌に掲載されていた旅行記や挿絵などを参考にして「80 日間」を執筆した。ヨコハマの日本アクロバット団の興行の場面の挿絵は、同誌 1869 年上半期号の日本の軽業師に関する挿絵にもとづいたものと言われている。(参考文献:増野恵子“見える民族、見えない民族” 神奈川大学など)			
⑪	Missionary travels and researches in South Africa / by David Livingstone	New York : Happer & Brothers	1858	00005439
	『南アフリカにおける宣教師の旅と探検』。リビングストン David Livingstone (1813 年- 1873 年) は、スコットランドの探検家、宣教師、医師。欧米人ではじめてアフリカ大陸を横断しヴィクトリア瀑布などを発見した。各地で宣教活動を行いアフリカの奴隷解放にも尽力した。帰国後にアフリカでの体験を著した同書は世界的なベストセラーとなる。その後ナイル川の水源地を調査する第 3 次アフリカ探検の途中マラリアのため亡くなった。			
⑫	The life and labors of David Livingstone / by J.E. Chambliss	Philadelphia : Hubbard Bros	1876	00114712
	南・中央アフリカにおけるリビングストンの業績を記述した図書。近代世界に残されたアフリカ大陸の野生のなかでのスリルに満ちた冒険、発見、経験の記録。内容は注意深く資料に基づいており、全探検のルートについて詳細な地図が付されている。(参考文献:「平凡社世界大百科事典」等)			
⑬	Japan as we saw it / by M. Bickersteth ; with a preface by the Bishop of Exeter	London : Sampson Low	1893	00342648
	『日本見たまま』メアリー・ビカーテス著。著者は、イギリス国教会の伝道主教 (missionary bishop) として来日した宣教師の妹。著者は兄父母と共に 1891 年夏、リヴァプールからケベック、パンパシフィック鉄道で西へ、ヴァンクーバーから太平洋を渡り横浜港へ、日本に各地の伝道所 (station) などに 54 日間滞在、長崎港からシンガポール、スエズ運河を経由して帰国した。日本では、濃尾大地震(1891 M8.5) を大阪で体験し同書にも写真と共に記録している。(※参考文献:『世界一周の誕生』文春新書 2003)			
⑭	Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan / under the command of Commodore M.C. Perry, and under his supervision by Francis L. Hawks	New York : D. Appleton	1856	00076721

	日本開国交渉のため 1853 年浦賀に来港したペリー提督 (Matthew Calbraith Perry 1794-1858) 監修による報告書の抄録版。編者のフランシス・ホークス (1798-1899) は米国ノースカロライナ出身の聖公会牧師、史料編集者。ペリーは「蒸気船海軍の父」とも言われ、威圧的な姿勢は「黒船」と共に江戸の人々に強い印象を与えた。翌 54 年横浜沖に再来日し「日米和親条約」、琉球にも寄港して「琉米修好条約」を締結した。ペリーの日本遠征は、学術調査的な目的も持ち、イギリスの租借地である香港や広東、マカオ、上海、琉球などが挿絵と共に記述され、地形、日本と中国の農業、函館付近の鉱産資源、琉球、江戸・下田、北海道などの地図、天体観測の結果なども報告されている。同書の邦訳には『日本遠征記』(岩波文庫 4 巻) などがある。			
	Die Expedition in die Seen von China, Japan und Ochotsk / von Wilhelm Heine	Leipzig : Otto Purfürst	1858	87-80113
⑮	ヴィルヘルム・ハイネ(1827-1885)はドイツ・ドレスデン生まれの画家。アメリカに亡命後、ペリー提督の日本遠征に随行し航海記とスケッチをまとめた。日本人については友好的に“活気に満ちた知性豊かな民族、儀式と作法が生活の重要な部分を占める民族”等と表現している。初版は 1856 年刊。翻訳書は『ハイネ世界周航日本への旅』(「新異国叢書」雄松堂出版)。			
	The Century atlas of the world / prepared under the superintendence of Benjamin E. Smith	New York : Century	1897	00016132
⑯	アメリカの百科事典編集者ベンジャミン・スミスによる大型の世界地図帳初版。立教が築地にあった頃に聖公会あるいは宣教師により寄贈された図書。			
その他の関連図書、参考図書 (所蔵資料)				
	Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807 / von G.H. von Langsdorff. vol.1	Frankfurt : Friedrich Wilmans	1812	52109653
①	ハインリッヒ・ラングドルフ(1774-1852) は、ロシア貴族出身の博物学者、外交官・政治家。「世界周航艦隊」に同行し、長崎に来航した。通商交渉を行うが拒否される。第 1 巻はコペンハーゲン、ブラジル、南海、カムチャッカ、日本への航海。日本人の習俗などを紹介した多くの石版画が収録されている。(参考文献:『知られざる世界への挑戦』京都外国語大学 2012)			
	Life and Voyages Of Columbus / by Washington Irving vol.1-3 (The Works of Washington Irving) New edition, revised	New York: G.P. Putnam	1853	00010037-39
②	アーヴィング『コロンブスの生涯と航海の歴史』改訂新版。著者は国際的なアメリカの随筆・小説家。新大陸やコロンブスについての古文書を収集して執筆されたクリストファー・コロンブス(1451?-1506)の伝記。初版は 1828 年に出版された。			
	The treaty ports of China and Japan / by Wm. Fred. Meyers, N.B. Dennys and Chas. King	London : Trübner	1867	52252291
③	世界初の英文日本ガイドブックと言われる。イギリスの外交官メーヤーズが北京のイギリス公使館書記官を務め、中国諸港で領事として任務についた経験を生かして製作した北京、江戸、香港、マカオなど中国・日本の条約港地図。旅行者、商人、居住民の携帯用案内書。日本については 69 頁分記載されている。復刻版も本学で所蔵されている。			
	Life and Adventure in Japan / Warren Clark.	NY: American Tract Society	1878	87-34202
④	『日本における生活と冒険』I.ワード・ウォル・クラーク (1849-1907) は、北米ポーツマス生まれ。静岡学問所で物理・化学を教えた。念願だった富士登山を 1873 年に敢行した。帰国後の 1878 年に本書を著した。第 6 章に富士登山記がある。			
	Young Japan : Yokohama and Yedo / by John R. Black	Yokohama : Kelly	1880-1881	00065121 00065122
⑤				

	ブラックは幕末に来日し、ジャーナリストとして活躍した。横浜で英字新聞「Japan Gazette」や「Far East」などを刊行し、近代日本の新聞の父とも言われている。日米和親条約や井伊大老暗殺など幕末期の重要な事件を克明に記録している。翻訳書は「ヤング・ジャパン：横浜と江戸」（東洋文庫）平凡社 1970。			
⑥	Album Jules Verne / iconographie choisie et commentée par François Angelier	[Paris]: Gallimard	c2012	52233746
⑦	『世界一周旅日記』今井安太郎著	福音社書店	1936	00042816
⑧	『ネリー・ブライ物語：世界初の婦人記者』アリス・ノーブル著 佐藤亮一訳	三省堂	1976	96-72066
⑨	『世界一周画報』石川周行編 明治 41 年 朝日新聞会社発行（明治欧米見聞録集成第 30 巻）	ゆまに書房	1989	89-12256
⑩	『80 日間世界一周』マクル・ハイン著 山村宣子著	心交社	1991	(未登録)
⑪	『トーマス・クックの旅：近代ツーリズムの誕生』本城靖久著（講談社現代新書）	講談社	1996	96-09798
⑫	『世界漫遊家たちのニッポン一日記と旅行記とガイドブック』横浜開港資料館編	横浜開港資料普及協会	1996	96-71492
⑬	『トマス・クックの肖像：社会改良と近代ツーリズムの父』蛭川久康著（丸善ブックス）	丸善	1998	42003242
⑭	『ボンジュール・ジャポン：フランス青年が活写した 1882 年』ウグ・クラフ著 後藤和雄編	朝日新聞社	1998	42010628
⑮	『八十日間世界一周』ジュール・ヴェルヌ作 鈴木啓二訳	岩波書店	2001	42238163
⑯	『海外観光旅行の誕生』有山輝雄著（海外歴史ライブラリー 134）	吉川弘文館	2002	42069758
⑰	『世界一周の誕生：グローバルイズムの起源』園田英弘著（文春新書）	文芸春秋社	2003	42106697
⑱	『絵で見る幕末日本』正・続 エメエ・アンベール著 茂森唯士訳（講談社学術文庫）	講談社	2004	42152754 42197916
⑲	『西洋旅案内』福沢諭吉・吉田賢輔編著（リプリント日本近代文学 124）	平凡社	2008	52140093
⑳	『ある明治女性の世界一周日記：日本初の海外団体旅行』野村みち著	神奈川新聞社	2009	52165680
㉑	『一〇〇年前の世界一周：ある青年が撮った日本と世界』カレマール・アハグ、ホリス・マルタ著	日経パブリッシング	2009	52167256
㉒	『日本初の海外観光旅行：九六日間世界一周』小林健著	春風社	2009	52148858
㉓	『知らされる世界への挑戦：航海、探検、漂流を記した書物百選』（創立 65 周年記念稀覯書展示会）	京都外国語大学附属図書館	2012	(未登録)
㉔	『ジュール・ヴェルヌの世紀：科学・冒険・《驚異の旅》』フィリップ・ド・ラ・コタルディエール、ジャン＝ポール・ドキス監修；新島進、石橋正孝訳	東洋書林	2009	52148990
㉕	『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜：八十日間世界一周の世界』新島進編	慶應義塾大学出版会	2010	52178406
㉖	『時空をこえる本の旅 50 選』東洋文庫	東洋文庫	2010	(未登録)
㉗	『「驚異の旅」または出版をめぐる冒険：ジュール・ヴェルヌとピエール＝ジュール・エツツェル』石橋正孝著	左右社	2013	52267643